

ビワ生育情報

千 葉 県
平成20年10月号

平成20年7～9月の気象

平成20年7～9月の気象は表1に示した。7月の平均気温は第1及び第2半旬を除く全ての半旬で平年を上回り、月平均は24.7℃で平年より0.4℃、前年より1.9℃高かった。降水量は全ての半旬で平年を下回り、第3、第5半旬には降雨がなかったため、月合計は16mmで平年の8%、前年の4%であった。日照時間は第2半旬を除く全ての半旬で平年と同じか上回り、月合計が206時間で、平年の1.2倍、前年の2.1倍であった。本年の関東地方の梅雨明けは、7月19日で平年より1日、前年より13日早かった。

8月の平均気温は第1～第3半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、月平均は25.8℃で平年より0.1℃、前年より0.8℃低かった。降水量は第6半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、第2、第4半旬には降雨がなかったため、月合計は79mmで平年の49%、前年の11.3倍であった。日照時間は第2～4半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、月合計は187時間で平年の85%であった。

9月の平均気温は第1及び第5半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、月平均は22.7℃で平年より0.3℃、前年より0.7℃低かった。降水量は第4半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、20日には台風13号が館山沖を通過したことに伴い100mm近い大雨があったが、月合計は190mmで平年の76%、前年の66%であった。日照時間は第1及び第2半旬を除く全ての半旬で平年と同じか下回り、月合計は133時間で平年の91%、前年の97%であった。

表1 平成20年7～9月の気象(暖地園芸研究所)

月	半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(時間)		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
7	1	22.1	22.7	22.9	11	36	13	26	21	11
	2	22.8	23.3	21.7	1	44	7	13	23	12
	3	24.8	24.4	23.1	0	38	291	35	25	1
	4	25.5	24.4	20.8	2	24	22	38	28	10
	5	26.5	25.0	23.5	0	24	30	50	33	26
	6	26.2	25.7	24.4	3	23	25	44	44	37
月平均/計		24.7	24.3	22.8	16	190	386	206	175	97
8	1	26.8	25.9	26.6	2	27	0	33	37	44
	2	27.3	25.9	26.8	0	24	0	46	37	61
	3	27.1	26.0	27.5	4	24	0	43	36	54
	4	25.7	26.0	27.3	0	32	0	36	35	*
	5	23.5	25.9	26.5	10	27	4	13	35	*
	6	24.8	25.6	25.4	64	29	3	16	40	*
月平均/計		25.8	25.9	26.6	79	161	7	187 (122)	220 (110)	* (159)
9	1	26.0	25.0	24.0	3	27	34	38	31	19
	2	23.6	24.5	25.0	4	46	124	33	28	23
	3	23.5	23.8	23.2	0	29	70	25	25	16
	4	22.0	22.7	24.8	147	38	0	12	22	38
	5	23.5	21.6	24.1	3	47	0	20	20	30
	6	19.0	20.5	20.1	34	64	60	4	20	12
月平均/計		22.7	23.0	23.4	190	250	287	133	146	137

*: 欠測値

()内数字: 第1～第3半旬までの合計

台風による被害を受けた樹の管理

本年は今までに2個の台風が日本列島に接近した。9月20日に台風13号が関東に接近し、最大瞬間風速は20.1m(館山測候所調)を記録した。幸いなことにビワ産地では生産に差し障りが出るような大きな被害は発生しなかった。強風によって樹が倒された場合には樹を起し、損傷程度に応じて枝を切りつめる。

起こせない樹はそのまま栽培を続けるが、管理しやすいように枝を整理し、倒伏によって根が地面に露出しているところは、覆土をして根の回復をはかる。このときパーク堆肥と一緒に混ぜると、細根の再生が促され樹の回復が早い。紋羽病の恐れのあるところは防除基準に従って散布する。

11月の管理

11月中旬には主要品種の開花が始まる。10月からひき続き行っている摘房・摘蕾は開花前に終わらせたい。アブラムシの防除は摘房・摘蕾の終了後に行う。

摘房・摘蕾

11月から12月にかけて摘房・摘蕾を行う。1樹の全新梢数の半数の枝に花房を残す。發育不良の花房、混み合った花房等の不要な花房を間引いて1樹内の花房数を調整する。

摘房をすると、残した花房が充実するので、開花、結実及び幼果の初期生育が良好に進み、品質の揃った果実を生産することができる。また、樹内の花房数が少なくなるので翌年の摘果作業が軽減される。

摘房と同時に、残したつぼみを摘蕾する。花房基部から3段目までの小果梗の中から充実した2段を残して他をかき取り、花房内の花数を調整する。摘蕾はつぼみの充実を促すので摘房と同様の効果がある。花房の長さが3～5cmの時に摘蕾するのが最も有効で、開花期の延長を図ることができる。寒害を受けやすい園ではこの時期を逃さないように早めに摘蕾を行う。

アブラムシの防除

ビワに寄生するナシミドリオオアブラムシは緑色大形のアブラムシで、ビワの葉裏の主脈にそって並んで加害する。寄生した葉は紅(黄)葉し、次々と加害しながら繁殖していくので短期間のうちに、はなはだしい落葉を見ることがある。また排泄物はすす病を誘発する。

防除は発生状態を見て随時行うが、発生初期に行うのが効果的である。11月はナシなどから移ってきて繁殖期に入るので、この時期の防除は春の発生を抑えるために有効である。

樹及び花房の發育

花房の発現期は表2に示した。「楠」が9月14日で平年と同じ、前年より4日遅かった。「大房」が9月17日で平年より2日早かったが、前年より6日遅かった。「田中」が9月12日で平年より3日早かったが、前年より4日遅かった。平年よりやや早いのは梅雨明け後、晴天が続き高温・寡雨による土壤乾燥の影響と考えられる。

夏枝及び秋枝の発生は平年並みで樹の生育も順調である。

表2 花房発現期(暖地園芸研究所)

品 種	本 年 (月.日)	平 年 (月.日)	前 年 (月.日)
楠	9.14	9.14	9.10
大 房	9.17	9.19	9.11
田 中	9.12	9.15	9.8

平年：1983年～2007年の25年間の平均

【生育情報の問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>